

学生の学びを深めるための現場を活用したリモート授業の在り方

大森 洋子^{*1}・高橋 千恵^{*1}・中原 早苗^{*1}・尾川 真子^{*1}・高田 和宜^{*1}・松村 佳枝^{*1}
富士本武明^{*2}・川崎 徳子^{*3}・中島 寿子^{*3}・白石 敏行^{*3}

A study on remote classes based on kindergarten educational practice to deepen students' learning

OMORI Yoko^{*1}, TAKAHASHI Chie^{*1}, NAKAHARA Sanae^{*1}, OGAWA Mako^{*1}, TAKATA Kazuyoshi^{*1},
MATSUMURA Kae^{*1}, FUJIMOTO Takeaki^{*2}, KAWASAKI Tokuko^{*3}, NAKASHIMA Hisako^{*3}, SHIRAIISHI Toshiyuki^{*3}

(Received August 6, 2021)

キーワード：幼児教育、リモート授業、現場の活用

はじめに

幼児教育コースでは、1年生の「基礎セミナー」、2年生の「保育内容環境」及び「保育内容人間関係」、3年生の「幼児教育基礎実習」の授業の一部において、学生が附属幼稚園を訪問し、保育環境や園児の姿、保育の様子等を参観したり保育参加を行ったりしている。また、その中で、学生の保育内容の理解と幼児理解を深めることを主な目的として、附属幼稚園教員が実地指導講師としてミーティングや講話等を実施している。この取組は20年以上続けており、「学生が現場で学ぶことの効果」についてはすでに確認されているところである（磯村・大森・川崎・實松・荘司・高田・友定・中尾・永久・中村 2002）。

しかしながら、令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大により、学生の附属幼稚園訪問が困難な状況となった。そこで、前期に実施予定であった学生の附属幼稚園訪問保育（環境見学・保育観察・保育参加）は、全学年中止とし、附属幼稚園教員がかかわってのリモート授業へと切り替えた。また、3年生の後期教育実習期間中の2年生の参観実習や、教育実習事後指導もリモート授業を導入して実施することとなった。

保育観察や保育参加に代わるものとしてのリモート授業の導入は、学生にとっては、本来の目的である「現場で実際に体験する」という部分が欠如することになるため、学びの内容が異なってくることは否めない事実である。しかしながら、担当する附属幼稚園教員が事前に指導の意図に沿った画像や動画を用意して実施することにより、実際に体験はしていなくても同じ場面や事例を共有して一緒に考えることができ、学びの効果が期待できるとも考えられる。

そこで、本プロジェクトでは、学生が保育について学びを深めるために有効となるような、現場を活用したリモート授業の方法や指導内容について模索し、その効果を探ることとする。このことによって、附属幼稚園と約4キロ離れていて、頻繁な往来が難しい状況にある学部学生が、学びの過程において現場を有効活用する方法について、新たな方向性が導かれると期待できる。

なお、ここでの「現場を活用」とは、「幼稚園の保育実践、画像や動画、保育記録などを活用して、現場の附属幼稚園教員が進める」ということを指すものとする。

1. 目的と方法

1-1 研究の目的

本プロジェクトでは、リモート授業における現場の活用方法を探るため、次のことを明らかにする。
○保育観察や保育参加に代わるものとしての、附属幼稚園教員が関与するリモート授業の効果

*1 山口大学教育学部附属幼稚園 *2 下関市立王喜小学校（前 山口大学教育学部附属山口小学校）

*3 山口大学教育学部幼児教育コース

○現場（幼稚園の保育実践、画像や動画、保育記録など）を活用した効果的なリモート授業のあり方

1-2 研究方法

研究の方法は次の通りである。

- ①令和元年度まで附属幼稚園で保育観察や保育参加を実施していた部分について、画像や動画を活用した附属幼稚園教員によるリモート授業に切り替えて実施する。
- ②導入したリモート授業について、3年生を主な対象として、レポートや振り返り（実施後の反省や気づきの報告、話し合い）、アンケート、聞き取りなどから、学生の学びの内容を整理する。
- ③整理した学びの内容から、現場を活用したリモート授業の効果及び、効果的なリモート授業の在り方について探る。

1-3 プロジェクトの実際

令和元年度まで幼稚園において実施していた学生の保育観察や保育参加に代わるものとして、令和2年度に附属幼稚園教員が関与して行ったリモート授業は、表1のとおりである。本稿では、特に、教育実習実施学年である3年生の「幼児教育基礎実習」と教育実習事後指導(表中網掛部分)を中心に、リモートの授業の在り方を探る。

表1 令和2年度に実施した附属幼稚園教員が関与した学部授業一覧

対象学年	授業名	回数	実施日	内容
1年	「基礎セミナー」	1回	6/25	園環境の見学に代えて、写真と動画の解説により、園環境や園生活の様子、実際の遊びの様子などを紹介した。
2年	「保育内容環境」 「保育内容人間関係」	2回	7/21 7/28	保育観察・保育参加に代えて、写真と動画の解説により、園生活や園環境、遊びの様子、環境にかかわる姿、保育者や友達にかかわる姿について解説した。
3年	「幼児教育基礎実習」	2回	7/1 7/8	保育参加に代えて、コロナ禍の保育や環境構成、教材研究について（副園長）、学年や学級の様子、主な遊びの様子と保育者の援助、幼児の姿と保育者の願い（担任）を解説した。
3年	教育実習事後指導	3回	2/5 2/8 2/9	担当学生は、来園して降園時の指導で自作のパネルシアターやペープサートなどを実践した。その後、参加学生及び学級担任全員、副園長とで、振り返り（演じ方の反省や教材理解についての話し合い）を行った。他の学生は、担当学生が演じる様子をリモートで視聴した。

2. 結果および考察

2-1 「幼児教育基礎実習」（リモート授業）の内容

9月に附属幼稚園での教育実習を控えている3年生にとっては、幼稚園という現場での実際の保育参加は特に重要である。「幼児教育基礎実習」での保育参加は、学部授業で学んだ教育課程や指導計画、幼児理解等の理論などについて、実際にはどういうことかを具体的に学ぶ場であり、子どもの実際の姿から実感を伴って学ぶこと、具体を通して考えることにその意味があると考えている。また、学生自身も秋に自分たちが実習をするクラスで保育参加を行うことには特別感をもっており、実習に繋がるものとして期待や学習意欲も高い。このような意味をもつ「保育参加」をリモート授業に代えるにあたっては、「現場のことを詳しく伝え、よく知ってもらうこと」と「保育参加を実施した場合にミーティングで話題にする内容について触れること」に重点をおくこととした。そこで、リモート授業においても、保育参加実施時と同様に学級担任が中心的にかかわることとした(表2)。

表2 附属幼稚園教員がかかわった「幼児教育基礎実習」(リモート授業)の内容

<p>【ねらい】</p> <p>①担当クラスの様子を含め、附属幼稚園の保育の様子や概要が分かる。</p> <p>②この時期の子どもの実態や遊びの様子、担任の考える保育の方向や援助について知る。</p> <p>③学級担任や幼稚園教員のことを知る。</p> <p>④これらを通して、教育実習に対する不安を軽減するとともに、実習への期待や意欲を高める。</p> <p>⑤学部授業で学んだ教育課程や指導計画、保育案、幼児理解等について、実際の保育の様子から具体的に学ぶ。</p> <p>【内容】</p> <p>(第1回) 7月1日(水) 14:45~16:30 全員同室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14:45~15:00 附属幼稚園の保育環境と保育方針、全体的な園生活の様子など(担当:副園長) ・15:00~15:50 この時期の学年の実態、学級の子どもたちの生活と遊びの様子、子どもの姿に対する保育者の願いや配慮などについて(担当:各学級担任) ・15:50~16:30 学生より質問、授業の振り返り(印象に残ったこと、学んだこと、実習に向けて思うこと等)(コーディネート:大学教員) <p>(第2回) 7月8日(水) 14:45~16:30 全員同室→学年毎の部屋→全員同室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・14:45~15:00 コロナ禍の保育・幼児の製作活動(実習課題と対応)について(担当:副園長) ・15:00~15:50 この時期の学級の子どもたちの具体的な遊びの様子、それについての保育者の捉えや環境構成、援助の実際、教育実習の頃の子どもの姿(担当:各学級担任) ・15:50~16:30 学生より質問、授業の振り返り(①保育について尋ねたいこと、②教育実習を含め全般的に尋ねたいこと)(コーディネート:大学教員)

2-2 「幼児教育基礎実習」(リモート授業)後のレポートから読み取った学生の学び

「幼児教育基礎実習」(リモート授業)後に提出されたレポートには、次のような学びや感想が見られた。

○子ども理解に関すること

- ・どのクラスも、子どもたちが園生活に慣れてきて、居場所を見つけたり友達を見つけたりして安心して楽しくすごしていることが伝わってきた。
- ・水など、ひとつの教材に対して、いろいろななかかわり方をする子どもがいることが分かった。
- ・3歳児はまだ自分の思いを伝えたり表現したりすることが難しい年齢であると分かった。
- ・5歳児は昨日の続きの遊びをしたり、思いが続いたりするのだと知った。
- ・自分の思い通りにならない経験をすることで、相手の友達にも思いがあるのだと気づいていくのだと思った。
- ・園で遊んでいくうちに、遊びや共通の好きなものなどを通して、次第に友達を意識するようになり、仲良くなっていくのだと改めて分かった。
- ・年齢があがるにつれて、かかわる友達が増えたり、友達の存在を意識したり、役割分担しながら多数で遊んだりするようになっていくのだと知った。
- ・ひとつのできごとについて、その前後関係や理由について考えることが大事だと学んだ。
- ・どの年齢の様子も聞くことができたので、年齢による特徴や発達の様子がよく分かった。
- ・今の時期の3歳から5歳の各学級の様子を知ることができ、発達段階や遊びの変化を知ることができた。

○環境構成や援助に関すること

- ・子どもの「やってみたい」という気持ちに敏感になり、子どもの好奇心をくすぐるような環境を用意したり、遊びが発展していくような環境を準備したりしたい。
- ・子どもの年齢や状況、時期に合った環境を構成することが大切であると学んだ。
- ・今子どもたちがしている遊びがその場限りで終わるのでなく、思いが続いていくことが大切だと思った。
- ・5歳児は、帰りの会で紹介する時間があることで、友達の作ったものを見て刺激をうけたり意見交換できたりして、次の日の遊びのヒントになると思った。

○保育者の思いや願い、援助に関すること

- ・子どもたちが自分のしたいことを見つけてしようとしている姿を大切にすることが重要だと知った。
- ・保育者は子どもの様子を見守りながら、必要なときに援助していくことが大切だと思った。

- ・保育者が子どもの気持ちを受け止め、言葉にしていくことが大切だと感じた。
- ・提案したり見守ったりして、子どもたちの思考力や想像力が育っていくことが大切だと思った。
- ・子どもたちが友達存在に気づき、友達と遊ぶことが楽しいと感じられるように、子ども同士をつなぐ声かけや援助をしたい。
- ・自分の思いや相手の思いを整理したり、解決方法を子どもと一緒に探したりできるようになりたい。
- ・一人一人の気持ちを考えて、その子が何を楽しんでいるのか、何に困っているのかに気づいて援助できるようにしたい。

○コロナ禍の保育に関すること

- ・コロナ禍でも園の様子が保護者に伝わるようにいろいろ工夫されていることが分かった。
- ・新しい生活様式のことを教えてもらい、コロナ禍で具体的に保育者がどのような配慮をすればよいかや、何に注意すればよいかを意識することができた。
- ・子どもは自分たちで距離がとれないので、環境面の配慮で距離を保てるようにすることが大切だと知った。

○教材研究に関すること

- ・教材研究で気をつけることや大切にすべきことについて学んだ。
- ・子どもたちが「楽しい」「できた」と思えるような教材を準備することが大切だと分かった。
- ・必ず自分で試して、難しいところや配慮すべきところを見つけ、対応を考えておくことが大切だと学んだ。
- ・壁面構成では、子どもたちの作品を生かしたり、季節感をもたせたりすることも大切だと分かった。
- ・自分たちが楽しんで作った物が、形を変えてまた楽しい壁面になっていくアイデアが素敵だと思った。
- ・授業で触れたことがある教材について、「やったことがある」ではなく、保育でどのように扱うか、どこが楽しいか、配慮点は何かなどをしっかりと理解しなくてはならないと思った。

○園生活全体に関すること・感想

- ・エピソードやたくさんの写真を交えて実際に先生方から話を聞くことで、これまでほとんどもていなかった今年の子どものイメージをもつことができた。具体的な幼稚園の子どもの様子が分かった。
- ・今の時期の子どもたちがどんなことに興味をもったり楽しんだりしているのかが分かった。
- ・子どもたちに幼稚園が楽しく、安心できる場所であるということを感じてもらうことが大切だと思った。
- ・担任の先生がどんなふう子どもたちを捉えているかに触れることができて、大変参考になった。
- ・いろいろな具体的な姿を教えてもらったので、これまでとは違った視点から指導計画を読んだり、教材研究をしたりできそうだと思った。
- ・学んだことを生かして、子どもたちの遊びや生活に即した保育案を考えたい。
- ・子どもの生活は連続していて、思いやつながりをもって遊んでいるのだと分かった。

2-3 「幼児教育基礎実習」のアンケートから読み取った学生の学び

実施した「幼児教育基礎実習」（リモート授業）について、学生にアンケート調査を行なった。調査実施日は、教育実習初日の9月17日である。質問項目は表3のとおりで、結果は次のようになった。

○『「幼児教育基礎実習」で「保育参加」が実施されていた場合、「保育参加」で学びたいと思っていたことは何か』という問に対する学生の回答は、①子どもたちの実際の姿（遊びや活動の様子・友達とのかかわりの様子・友達関係・子どもの興味や関心・子どもの顔や名前・発達特性）、②園生活の1日の流れ（生活の流れ・帰りの会の様子）、③環境構成の実際（保育室の様子・壁面）、④保育者のかかわり（援助・ふるまい・言葉がけ）などであった。

○上記で学びたいと思っていた内容について、「2回にわたるリモート授業で学ぶことができたか」という問に対しては、3年生11名中2名がリモート授業においても「よく学べた」、8名が「まあまあ学べた」と答え、1名が「あまり学べなかった」と回答した。リモート授業であっても学生が学びたいと思っていたことについてはある程度学べていたことが分かる。

○「リモート授業において実際に学んだことは何か」という問については、①子どもたちの実際の様子（最近の遊び・具体的な遊び・今の子ども姿・友達とのかかわり・子どもの興味や関心・年齢による遊びやかかわり方の違い・他の年齢やクラスの子どもの様子・保育者から捉えた子どもの姿）、②1日の流れ、コロナ禍の保育、③環境構成（コロナ対策・遊びの環境・教材研究の重要性）、④保育者のかかわり（保育者の援助の方向や願い・保育者の子どもの捉え・保育する上での留意点や工夫）などの回答があった。これらは、

実際に学びたかったことと類似しているが、より具体的な記述になっている。

また、コロナ対策、教材研究の重要性、保育する上での留意点や工夫、保育者の援助の方向や願いなど、新たな視点での学びも見られた。

つまり、保育参加では「実際に見たり触れたり」して学ぼうとしていたが、リモート授業では、その姿をどう考えたり捉えたりするか、教材研究の重要性、指導上の留意点など、保育行為の根拠となる考え方についても学んでいることが分かる。「実際の姿」のみにとどまらず、そこから考え方や捉え方に言及していることに違いが見られる。

○「保育参加ではなく、リモートだからこそ学べたことや気づいたことがあるか」という問いに対しては、11名全員が「ある」と回答し、内容は次のようであった。

- ・担任の先生からの視点で子どもたちの実態を捉えることができた。
- ・先生が大事にしていることや援助の方向を知ることができた。
- ・担任の先生が普段どのように子どもとかわっているのかを細かく聞け、保育者としてのかかわり方を多く学べた。
- ・その日1日だけの様子でなく、その時期全体の子どもの様子を知ることができた。
- ・直接関わることで難しい、様々な角度から子どものかかわりについて考えることができた。
- ・他クラスの先生の実践やいろいろな学年の子どもの様子を知ることができた。
- ・多くの写真やいろいろな先生の話から想像して考えることができた。

学生の学びとして注目すべき点は、学級担任の視点から捉えた保育や子どもとのかかわりについて知ることができ、「保育者」としての視点に立つことができたということである。保育者が大事にしていることや援助の方向、遊びや子どもに対して保育者がどう捉えどう思っているかなどが大変参考になったという記述が多く見られた。子どもとかわることからだけでは学ぶことが難しい「保育者としての援助やかかわり」について考えるきっかけになったことが分かる。学生が保育参加だけで気づいたり感じたりする内容には限界がある。学級担任から詳しく聞くことによって初めて「保育者の援助の在り方」などに目が向き、様々な視点に立った情報を聞くことで多くを学んだり理解したりすることにつながると考えられる。

また、その日1日だけでなくその時期全体の子どもの様子を知ることによって、長期的な視点をもつことを知ったり、他クラスの子どもの様子やいろいろな保育者の考えに触れることで、年齢による違いや保育者の個性を知ったりできたことも学びの内容としてあげられた。附属幼稚園教員が視点を明確にして、この時期の様子、遊びや子どもの捉え、保育者の願いや援助、環境構成等について話すことにより、学生の学びの多くが保障できるということが確認できた。

○リモート授業に対する意見や要望については、今回同様、写真・ビデオ・スライドなどを多く使ったり、保育室や子どもの作品などを映したりしてほしいという意見があった。画面共有できるよさを活用することでさらに可能性が広がると考えられる。

表3 「幼児教育基礎実習」(幼稚園担当分)に関するアンケート

(3年生・9月17日)

「幼児教育基礎実習」(幼稚園担当分)に関するアンケート

このアンケートは、「幼児教育基礎実習」における幼稚園担当分について、「保育参加」と「リモート授業」のメリットやデメリット、リモート授業の可能性について探るものです。不利益を被ることはありませんので、率直な考えをお聞かせください。

担当学年(○をしてください)	3歳	4歳	5歳
1 「幼児教育基礎実習」での「保育参加」が実施されていた場合、「 保育参加 」で学びたいと思っていたことは何ですか(具体的に・箇条書きでよい)			
[]			
2 1であげたことは、2回にわたる幼稚園教員によるリモートでの「幼児教育基礎実習」(幼稚園担当分)で学ぶことができましたか? あてはまるものに○をつけて、下に具体をお書きください。 よく学ぶことができた まあまあ学べた あまり学べなかった ほとんど学べなかった			
[]			
3 「幼児教育基礎実習」の リモート授業 (幼稚園担当分)において、実際に学んだことは何ですか(具体的に・箇条書きでよい)			
4 保育参加ではなく、リモートだからこそ学べたことや「気づいたことがありますか。それは何ですか」	ある	ない	
[]			
5 リモートによる「幼児教育基礎実習」(幼稚園担当分)を受けて良かったと思うことは何ですか。			
6 「このようなリモートにするとうい」などの意見があれば聞かせてください。			
7 その他、ご意見等あれば自由にお書きください			

2-4 「幼児教育基礎実習」(リモート授業)の成果

「幼児教育基礎実習」における保育参加の主なねらいは、「幼稚園や子ども、保育のことを知る」ということであり、このことについては、保育参加に代わるものとしてリモート授業を実施した場合であってもある程度達成できるということが分かった。また、そのためには、画像や動画等を使用することによって、園環境やその時期の遊び、子どもの様子などをより詳しく、より分かりやすく伝えることが重要であると確認できた。附属幼稚園教員が適切な画像や動画を使用しながら、遊びや子どもの実態に対する保育者の捉え方や願い、援助の視点、季節や時期の捉え、育ちの連続性や長期的発達の視点、などについて解説することで、リモート授業であっても「幼児教育基礎実習」で学んでほしい内容について学ぶことが可能である。また、事前に画像や動画などを用意することで、その日1日だけではない子どもの様子を知ることができ、より総合的にかつ多面的に学ぶこともできる。学生の学びの内容には、附属幼稚園教員がどのような画像や動画を用意して、どのように語るかが大きく関係しており、事前準備と的確な解説が大変重要である。

2-5 ハイブリッド型「教育実習事後指導」の実施

教育実習を終えた3年生は、例年2月上旬頃に事後指導の一環として附属幼稚園で保育参加を実施している。ここでの主なねらいは、①保育の場で活用できる教材とその実践のための保育案を作成すること、②保育参加(終日)を通して成長した3学期の子どもの姿に触れるとともに、作成した教材と保育案をもとに保育実践を行うことである。

しかし、令和2年度においてはコロナ禍で終日の保育参加は困難であるため、附属幼稚園での事後指導は、作成した教材を活用した保育実践を中心に行うこととした。具体的内容は次のとおりである(表4)。

①学生は、教育実習で担当したクラスの子どもたちにふさわしい教材を作成し、作成した教材を用いた実践のための保育案を作成する(表5)。

②1日に来園する学生は3~4名とし、3日間に分けて降園前に来園して、準備した教材と保育案をもとに帰りの会で保育実践を行う。来園しない学生は、来園した学生が教材を使って保育の様子をリモートにて観察する(図1、表6)。

③保育後には、来園した学生及び学級担任5名、副園長とで、録画した保育実践(教材を使って保育している様子と園児の様子)を見ながら振り返りを実施する。

表4 ハイブリッド型「教育実習事後指導」の日程詳細

	学級担任	来園する学生	幼児教育の先生方・来園しない学生				
13:00	13:15までに入室を済ませておく (担当以外はミュートにしておく) 自分の担当学生の時間になったら撮影開始 *ホストの方で録画 開始時間は厳守 最初に5~10秒程度ワイドにとってから開始 (保育室内での位置や子どもとの距離などが分かるため) 演じ手と画面(ステージ等)の撮影でよい *次の人の時間が来たら、画面はこちらで切り替えますが、担当学生の録画は最後まで担任が行ってください (振り返りに使用するため) *終了後は、感想を聞くなどして続けてください(時間内であればそれも撮影)	13時までに来園 ・行動記録票持参 ・健康観察・チェック ・研修室へ 自分の担当時間の10分~15分前に保育室へ ・セッティング及びセッティングの確認 ・自分の担当時間(下表)になったら上演開始 ・上演後は、クラスの活動の援助をする (③④の人は、研修室で①②の上演を見て可)	13時からzoom入室可能 ・入室は自由(カメラ・ビデオはOFF) 氏名を入力して入室してください。 ・途中入室の場合、すぐにこちらが気付かない場合も考えられるのでご了承ください。 https://zoom.us/j/ (略) ミーティングID: (略) パスコード: (略) 下の表の時間に上演閲覧が可能です。				
		日・学級	花	風1	風2	星1	星2
		2/5 (金)	学生A パネルシアター ②13:30~	学生B ペープサート ③13:40~		学生C スケッチブック シアター ①13:15~	学生D パネルシアター ④13:50~
		2/8 (月)	学生E パネルシアター ②13:30~		学生F ペープサート ③13:40~	学生G パネルシアター ①13:15~	学生H ペープサート ④13:50~
2/9 (火)	学生I ペープサート ②13:30~	学生J パネルシアター ①13:15~	学生K パネルシアター ③13:45~				
保育後	保育後は各クラスの掃除・明日の準備						
15:00~	全員で振り返り(演じ方・子どもの反応・題材・教材特性など)						

表5 学生が作成した教材研究レポートと保育案

教材研究レポート		保育案レポート	
氏名 ○●●●●		4歳児クラス ○●組 男児○名 女児○名 計○名	
教材 ペーパーサート 「ともだちや」		保育者 ○●●●●	
<p>1. この教材を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな場に関わりたい気持ちはあるが、なかなか自分から加われない子どももいることが予想されることから、キツネとおオカミのやり取りを見て、誘ったり誘われたりして友達と一緒に遊ぶことが楽しいということを感じてほしい。また、キツネはイチゴが苦手であるが我慢してクマと一緒にイチゴを食べている場面から、「IOちゃんは今楽しい気持ちかなかな」など、友達のことについて気付けるようになってほしい。そして、オオカミが大事にしていた宝物のミニカーをキツネにあげる場面から、オオカミの優しさや、友達がいることの素直さを感じてほしい。 トランプ遊びをすることが予想されることから、絵本のトランプ遊びの場面を、まだトランプ遊びをしたことがない子どもにも楽しそう、友達と一緒にやってみたいと思えるきっかけになってほしい。 「ともだちや」の絵本を基本実習で一度読み聞かせしたが、ペーパーサートで演じることで、絵本では動かない絵が動くというところに楽しさを感じられると考えた。また、表裏で絵が違ふところに面白さを感じられると考えた。 		<p>【予想される子どもの姿】</p> <p>登場する自分とやりたいことを見つけたら、友達と誘い合ったりして遊びを進めていく姿が見られ、仲の良い友達が増え一緒に遊んでいる。ぶつかり合いが起こった時には、思いが強すぎて手が出てしまうこともあるが、保育者が加わることで落ち着いて話したり、お互いに認め合ったりする。また、自分たちなりに解決しようとする姿も見られる。</p> <p>帰りの集まりでは、遊び紹介で友達を作ったものや遊びに興味を持ったり、友達や保育者と一緒に手遊びをしたり、絵本を見たりすることに楽しさを感じている姿が見られる。</p> <p>令和3年 2月 8日 (火曜日) 13:15~14:05</p> <p>ねらい ○ペーパーサートで「ともだちや」を見て、絵本では動かない絵が動くことを楽しむ。 ○友達ができること嬉しいという気持ちに共感する。</p>	
<p>2. 作り方</p> <ul style="list-style-type: none"> 絵本「ともだちや」(内田麟太郎・作、降矢なな・絵 偕成社 1998年1月)の文をもとに、分かりにくい部分などに少し言葉を足したりしながら脚本を作成する。 絵本の絵をもとに、絵人形や背景などを作成する。 <p>【絵人形】キツネ(提灯とのぼりに、竹串・白い糸・白いテープ使用)、オオカミ、ミミズのじいさん(割りピン・透明の糸使用)、ウズラのお母さん(草やぶの裏)、クマ(岩の裏、割りピン・透明の糸使用)</p> <p>【背景】くさやぶ(裏にウズラのお母さん)、岩(裏にクマ)、木、月(小物)トランプ、ミニカー、のぼり</p>  <ul style="list-style-type: none"> 舞台を作成する。 <ol style="list-style-type: none"> ダンボール(長さ約1m)二個を舞台の形になるように切る。 子どもがみえている部分の裏側に、ダンボールの切れ端を二つ重ねて付ける。 土をイメージして、茶色の画用紙を貼る。 		<p>療育の構成</p> <p>〈保育室〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが居る椅子とペーパーサートの舞台、机を用意しておく。 最初のナレーションの「ともだちって売れるのかな?買えるのかな?」の場面で、「買えないよ!と保育者の問いかけに対して答えたり、友達と言い合ったりする。 「ミミズのじいさんの顔が動いた!」「キツネだ!」「提灯が動いている!」「オオカミが怒った!」など思い思いに言葉にしなが、お話の世界に入り込む。 オオカミが怒る場面では、肩をびくっとさせて驚く。 最後ののぼりが落ちている場面では、「帽子落ちてよ!」と気づいたり、友達と言い合ったりする。 お話が終わった後に、「キツネさんよかったね」と友達と言い合い、友達ができるうれいキツネの気持ちに共感する。 先生の話を聞く。 <p>○降臨する</p> <ul style="list-style-type: none"> 女の子から荷物を取る。 さうならの挨拶をする。 名前を呼ばれたら靴を履いて降臨する。 	
<p>3. どのように実践するか</p> <ul style="list-style-type: none"> ペーパーサートで、机の上に舞台を置いて実践する。 出番が来るまで待っていたり、出番が終わったペーパーサートはみえないようにしておく。 登場人物が話している場面では、ペーパーサートを動かしたり、声色を変えたりしながら演じる。 手が絵に重ならないように気を付ける。  <p>参考文献 絵本「ともだちや」 内田麟太郎・作、降矢なな・絵 偕成社 1998年</p>		<p>保育者の援助と留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> 準備を済ませて待つている子どもの姿を認める。 準備が早い子どもたちが楽しく待てるように手遊びをしながら待ち、準備が終わっていない子どもも興味を持てるようにする。 子どもが見やすいように、初めに見えるかどうか子どもに聞く。 初めに絵本で一度読んでおくことを確認して、今日は違ったものを見せることを伝え、絵本の絵が動くことに楽しさを感じられるようにする。 話す時は絵人形を動かさず、誰が話しているのか分かるようにする。 音が回るように、頭と身体を割りピンで固定したミミズのじいさんが、本当に首を回しているかのように透明の糸を引っ張って表現する。 キツネは少し高い声で、ウズラのお母さんは低い声で、クマはかすかすとしたような大きな声で、オオカミは低く少し大きい声で話すなど、登場人物の声色を変えて演じる。 キツネが元気のない時と、スキップして居る場面では、声色や大きさを変えたりしながら違いが出るようにする。 オオカミが「お代だて!」という場面では、スムーズに次の人形を下手側から出して、怒っている様子も表現し、声を大きくしたりして迫力が出るようにする。 絵人形をひっくり返す時などは素早くひっくり返し、表情が変わる面白さを感じられるようにする。 今日も楽しかった、明日も楽しみだと思えることができるように、笑顔で見送る。 	



図1 学生が演じるパネルシアターを見る子どもたちの様子をリモート配信する学級担任

表6 ハイブリッド型「教育実習事後指導」参加者一覧

実施日・時間	来園した学生	リモート参加者	振り返り参加者(幼稚園会場)
2月5日(金) 13:00~15:30	4名 自分が演じるとき以外は園内で視聴	学生7名 大学教員3名	実践した学生4名 学級担任5名・副園長
2月8日(月) 13:00~15:30	4名 自分が演じるとき以外は園内で視聴	学生7名 大学教員3名	実践した学生4名 学級担任5名・副園長
2月9日(火) 13:00~15:30	3名 自分が演じるとき以外は園内で視聴	学生8名 大学教員3名	実践した学生3名 学級担任5名・副園長

2-6 ハイブリッド型「教育実習事後指導」における学生の学び

保育後には、その日担当した学生及び学級担任5名、副園長とで、用意した教材を用いた実践について振り返りを行なった。振り返りの主な内容は、その題材を選んだ理由、題材の面白さはどこにあるか、教材作成上留意した点、演じるにあたって気をつけたこと、子どもの反応はどうだったかなどで、それらを通して、教材や題材の特性、演じ方、子どもにふさわしいとはどういうことかなどを話し合った。また、実施後に、ハイブリッド型「教育実習事後指導」についてアンケート調査を行った。振り返り及びアンケートに見られた学生の学びや気づきは次のようであった。

○教材・題材に関すること

- ・自分が選んだ教材や題材の特徴や良さ、面白さが改めて分かった。
- ・パネルシアター、ペープサートなど、それぞれの教材の良さがあるのだと分かった。
- ・それぞれの教材の特徴を生かして作ったり演じたりすることが大切だと学んだ。
- ・年齢にふさわしい題材やどの教材をどう使うと効果的になるかを考えることが大切だと思った。
- ・今後教材を作る際に、強調したい部分に気をつけたり、仕掛けを工夫したりすると良いと分かった。
- ・教材の色使い、縁取りの有無、大きさなどが重要で、見え方がずいぶん違うということが分かった。

○演じ方に関すること

- ・工夫した点や強調したい点は、自分で思っているよりも大きく演じた方が伝わりやすいと感じた。
- ・話のポイントや大事なところは、繰り返し、強調、大きな声でゆっくり言うなどがよいと分かった。
- ・タイミングや話す速度、出し方や出す方向などがとても重要で、見え方が全然違うと分かった。
- ・子どもたちにどう見えているか、どう動かしたらよいかなど、自分一人で練習しているときには分からないことに気づくことができた。
- ・自分が演じるとしたらどのように演じるだろうかと考えながら見る事ができた。

○子どもの様子に関すること

- ・子どもたちがどういう場面で反応しているか、どこを面白く感じているかなど、年齢ごとの違いや特徴が分かった。
- ・想像していた子どもの姿とは違う部分、考えただけでは見落としていた部分に気づくことができた。
- ・子どもたちの様子や反応をじっくり観察する機会があまりなかったので、子どもの様子が分かりとても参考になった。
- ・他クラスの実践の様子を見ることができて、新たな発見や気づきがあった。

○他の学生に関すること

- ・子どもの反応を見ながら演じていた。
- ・自分とは違う演じ方や話し方が参考になった。
- ・教材作成過程での工夫や配慮点、演じる上での工夫を知ることができた。
- ・他の学生が演じる姿を見ることで、いろいろなことに気づくことができた。

2-7 ハイブリッド型「教育実習事後指導」における成果

学生は、自作教材を使って子どもの前で実際に保育することを通して、多くのことに気づいたり改めて学んだりしていた。具体的な学びの内容としては、子どもにはどう見えているか、教材の特性や作り方（色使い、縁取りの有無、大きさ）、演じ方の留意点（話す速度・間・教材を出す位置や角度など）、子どもの反応などがあった。また、予想していた子どもの反応と実際の反応との違いや予期せぬできごとなどから、臨機応変に対応することの大切さにも気づいていた。学生にとって「現場で実践することの意義」が大変大きいことが改めて確認できる。

一方、リモートで他学生の実践を見ていた学生に視点をあてると、学生にとって「他の学生の実践を見る」ということが大変新鮮で、多くの学びをもたらしているということが分かった。「為すことによって学ぶ」ことはいわば当然であるが、それと同等あるいはそれ以上に、見ることによって、実践では気づかない視点に気づき、学ぶことができるようになったのである。今回は、自分と同時時間帯に実践を担当した学生以外の実践をすべて見る事ができたので、「見ることによって学ぶ」内容はさらに多様になったと考えられる。いろいろな教材のそれぞれの特徴や面白さ、教材作成上の工夫や留意点、演じ方の違いや留意点、年齢による反応の違いなどは、複数の実践を見ることで学べる内容であった。また、学生にとっては、「普

段一緒に学んでいる仲間」による「実習を行った子どもたちを対象」にした実践を見るため、より実感を伴って学ぶことができたと考えられる。

これらのことから、ハイブリッド型「教育実習事後指導」では、学生は、自身が演じることと他学生が演じることの両面から学ぶことができ、効果が期待できると分かった。また、学びの効果をより高めるためには、教材の特性や工夫の仕方、演技方、子どもの反応などといった分かりやすい視点を事前に示し、視点を定めて見たり一緒に考えたりすること、他者の実践の姿からも学ぶということが重要であると確認できた。

2-8 現場を活用したリモート授業の成果と課題

リモート授業のメリットは、様々な制約（保育参加ができない、距離が離れている、人数制限がある等）への対応が可能で、多数が同時に同じものに参加できるということにある。令和2年度は、コロナ禍により保育参加ができないという事態に追い込まれたが、このような状況であっても、リモート授業によってその制約を克服することができた。また、リモート授業の中で現場を活用することによって、学生は本来の授業でめざしていたねらいや内容に類似したことがらを学ぶことができた。このことから、現場を活用したリモート授業の効果について確認することができた。

また、リモート授業において「どのように現場を活用するか」については工夫の余地が多くあり、リモート授業の成果は、その活用の仕方に大きく左右されることも分かった。同じ画像や動画等を共有でき、学生が同じ視点で課題を共有して一緒に考えることがメリットであるリモート授業において、授業の効果をあげるには、当然のことであるが、どのような内容の画像や動画を使ってどのように見たり共有したりするかが大変重要となってくる。すなわち、「幼児教育基礎実習」においては、授業者である附属幼稚園教員がいかに目的に応じてプレゼン内容を集約し、意識化して伝えることができるかが重要となる。そして「教育実習事後指導」においては、附属幼稚園教員が共有する動画をどのような観点で撮影し、それを学生が見たり振り返ったりする際にどのような視点を提供するのが重要となる。

さらに、リモートの性質上、臨場感や実感が得にくいことは否めないが、リアルタイムで現場を活用することによって子どもの反応や保育者の即時的対応等がよく分かり、効果的な学びになる場合もあると分かった。目的によって、事前に準備した画像や動画を使用する場合と、その時の動画を生配信する場合とをうまく使い分けて活用するとよいと考えられる。

一方で、画像や動画等を活用し、目的に応じた授業を行うことで効果が大きくなるということは、授業の効果を高めるためには、目的に応じた画像や動画の撮影や選定に多くの時間を必要とするということを意味する。効果的な授業を追求すると現場教員の負担が増大してくるということも事実である。そのため、現場を活用したリモート授業では、準備するほど効果が大きくなることを認識しつつも、教員の極度な負担増につながらないようにすることも必要であると考えられる。

以上のことから、現場を活用したリモート授業についてまとめると、表7のようになる。

表7 幼稚園現場を活用したリモート授業のメリット・デメリット

現場を活用したリモート授業のメリット	現場を活用したリモート授業のデメリット
<ul style="list-style-type: none"> ○保育参加ができない場合でも保育の情報提供が可能。 <ul style="list-style-type: none"> ・保育と直結した画像や動画・実践例などを提供できる。 ・体験していないことや時間的経過を含むことも提供できる。 ○距離が離れていても参加が可能 <ul style="list-style-type: none"> ・学部の授業間の時間が少ない場合や、幼稚園の保育直後であっても実施できる。 ○課題の共有がしやすい <ul style="list-style-type: none"> ・画面共有により、同じ画像や動画等を同じ視点で見えて考えることができる。 ○同時に何人でも参加が可能 <ul style="list-style-type: none"> ・複数の大学教員や幼稚園教員が同時に担当して授業したり、授業や学生の様子を見たりできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○より入念な事前準備が必要 <ul style="list-style-type: none"> ・情報提供のための画像や動画等の準備、プレゼンの作成に時間がかかる。 ○担当者や環境整備が必要 <ul style="list-style-type: none"> ・ホスト、撮影者、情報管理者などが必要で、それらを幼稚園教員が行うのは負担である。 ・リモート用の場所の確保が必要である。 ○個人情報の保護・管理 <ul style="list-style-type: none"> ・実際の子どもの姿などを画像や動画等で使用することへの配慮が必要である。 ○臨場感や実感は得にくい (保育参加の代用としては限界がある)

リモート授業で学生の学びを深めるには、①子どもの姿や保育の様子が分かる画像や動画を活用し、身近な学びとなるようにすること、②目的や指導内容に適した教材（画像や動画、資料）を準備すること、③課

題や教材を共有できること生かして学び合いを促すこと、が重要であると分かった。今後は、さらに意識的に教材を選んだり、学び合いの促進を行ったりすることで、学生の学びをより深めていきたい。

おわりに

本プロジェクトでは、コロナ禍で現場に行くことができない学生が現場を知る方法の一つとして、附属幼稚園教員による現場の画像や動画、保育実践等を活用したリモート授業の可能性について探ってきた。現場を活用したリモート授業の効果は予想以上に大きく、コロナ収束後も、学部と附属幼稚園とが離れている場合の有効な授業方法として提案できるものであった。

令和元年度まで実施していた保育観察や保育参加では、実際の子どもの姿や保育者のかかわり、環境などから、多くのことを吸収し学ぶ学生の姿が見られた。一方で、何をどう見てよいか分からない、一つ一つの具体は見えるがそこでのポイントが分からない、感想や疑問が偏っているなどといった学生の姿もあった。学びの内容が学生の主体性と感性に委ねられてしまう部分もあったのである。しかし、今回のリモート授業では、学生自身の学ぶ力だけに頼るのではなく、意図的計画的に学びの内容を仕組むことにより、最低限押さえたい学びの保証ができたと考えられる。

また、学生にとっては難しいことである、発達の視点や長期的な視点をもって子どもの姿を見たり、カリキュラムの概念を理解したりすることも、附属幼稚園教員が子どもの姿を通して具体的に語ることでイメージできると分かった。これは、リモート授業に限られたことではないが、今後も学生指導の際に、意識してこのような内容を入れていくことで、学生の学びがより深まると期待できる。

学生は、保育観察や保育参加、学部での授業を繰り返し、回数や学年を重ねるごとに学びを積み重ねて、幼稚園教員としての力をつけていく。また、自分自身で気づき学ぶこともあれば、指導により導かれたり、学生同士で学び合ったりしながら学ぶこともある。それらのことを踏まえて、4年間の学びの内容と過程を意識して、段階を追った学びとなるように指導内容を構成し、その中に効果的にリモート授業を取り入れていくことで、学生の学びの深まりにつながると思う。

リモート授業を実施することにより、学部教員も附属幼稚園教員も授業に参加しやすくなり、学生の学びの姿や内容を実際に確認できる機会が増えるとともに、お互いに共有することが容易となった。また、学生の学びの内容を共有することで、学生の変容の姿や今後の課題等についても、ともに考えられるようになった。学部教員と幼稚園教員とが情報を共有し、協力し合いながら、これからもさらなる学生の深い学びを支えていきたい。

参考文献

- 民秋 言・安藤和彦・米谷光弘・上月素子・大森弘子（2020）：幼稚園実習〔新版〕，北大路書房。
文部科学省（2021）：幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開，チャイルド社。
宮里暁美（2020）：思いをつなぐ 保育の環境構成 4・5歳児クラス編～遊びを広げて学びに変える，中央法規出版。
大豆生田啓友・おおえだけいこ（2020）：日本版保育ドキュメンテーションのすすめ，「子どもはかわいいだけじゃない!」をシェアする写真つき記録（教育技術新幼児と保育MOOK），小学館。

引用文献

- 磯村朋世・大森洋子・川崎徳子・實松瑞栄・荘司泰弘・高田和宜・友定啓子・中尾佳代・永久眞知子・中村万紀子（2002）：教育実習内容の変遷(2)，山口大学教育学部 学部・附属教育実践研究紀要，第1号，121-136。